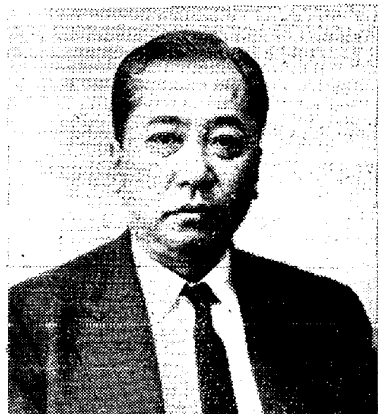


巻 頭 言

鉄 鋼 雑 感

桂 寛 一 郎*



日本鉄鋼業界の伸展はまことに素晴らしいものがあり、粗鋼生産において、1959年度は1830万トンに達して、フランスの生産を追い抜いて世界第5位の地位を占めるようになった。さらに10年後の需要予想は3800万トンとしているから、おそらくその地位をさらに高めることで

あろう。しかしながら問題点を多く含んでおり、その一つは鉄の価格を引き下げてゆくようにしなければならぬことである。この要素は沢山あるけれども、技術的改善研究にまつところのはなはだ多いと思われる。

従来の日本鉄鋼業は、その歴史のしからしめるところであるが、外国技術の導入によるものが大部分であつた。機械設備を製造するにしても、または製造技術の面においても、てつとり早い方法でやつてしまう方がむしろ賢明であつたかも知れぬ。しかしこのようなことをすると、それだけ製品のコストを高くするのであつて、外国品との競争に負けたり、国内消費の増大を妨げる結果となる。

最近の日本鉄鋼界の動きはどうであろうか。ようやく反省期に入つてきたものと私は感ずる。もちろん鉄鋼界のみならず、政府の施策の中にも、このような考え方が織り込まれてきたのであるが、まだ一本通つた筋金の欠如を感ずる。

昨年終りごろ欧洲鉄鋼調査団の一員として、欧洲各国の視察をする機会を得た。近い時機に正式の報告書が完成するはずであり、詳細はそれによつてお知らせ願うとして、大学教育、鉄鋼連盟、鉄鋼協会、研究機関などが一丸となつた合理的運営によつて、有機的活動をしている姿をみた。

日本も思想的にはこのような方向に向つてきたが、実際面においてはいろいろな困難な面があつて、苦労はあろうがなんとか打開してゆかぬと外国との競争に勝つことができぬと思われる。

さらに欧洲共同体も順次軌道にのつてきて、共同の研究とか共同の利益を目的とした諸施策を推進している点においては、あたかも一つの国のごとき強みを発揮するであろうと思われる。

筋金の通らないということはその結果として、必ず重大な欠陥を露呈してくるもので、日本人が組織や制度を考える場合、ややもするとおかしやすい誤であり、わが国と外国との大きな差が生れてくるの

* 日本鋼管株式会社技術部長

はこの辺にあるのではないかと思われる。

新技術の育成方法についても、考慮すべき多くのものを持つているように思われる。日本人は、個人の能力においてはすぐれたものを持ちながら、綜合力の發揮ができないといわれる。ある発明の工業化がおくれたり、阻害されたりして、他に先を越された場合の損失は実に大きいものであることは、外国技術の導入に支払われる対価をみても明かなことである。国全体の力を結集させなければせつかくの立派な考え方も実を結ばないのではあるまいか。国全体の力とまではいかなくとも、もつと結集された力がほしいものである。

日本の製品は芸術作品のようなものだということがいわれる。筆者も先年歐洲諸国の視察をおこなつたが同じような印象を得たものである。生産者側の一方的見方ではなくして、実用性ということからもつと研究をすべき点ではあるまいか。生産者側にもまだまだいたらぬ点はあるうし、これが改善をおこたつてはならぬが、需要家側においてもあるいはまた消費者においても、重点的な考え方をとる必要があると思われる。貿易自由化の段階において、価格の低減なくしては、競争に打ち克てぬことはいまさら申すまでもないが、この一つの対策としても考慮すべき問題であらう。

日本と諸外国との一般物価と鉄の価格との比率は日本の方が高い、すなわち日本の鉄は相對的にみて高価であるといえる。生産をあげ鉄の消費を増大して、文化国家を築き外国との競争に打ち克つためには、鉄の価格を下げなければならぬ。このためには、あらゆる面からの対策を必要とするが、上述のようなことを感ずるままに書きつらねて、大方の心に訴えて、なんらかの機会に少しでも改善されることを念願するものである。